

るのです。このようにして、種子は遠くへ運ばれていきます。

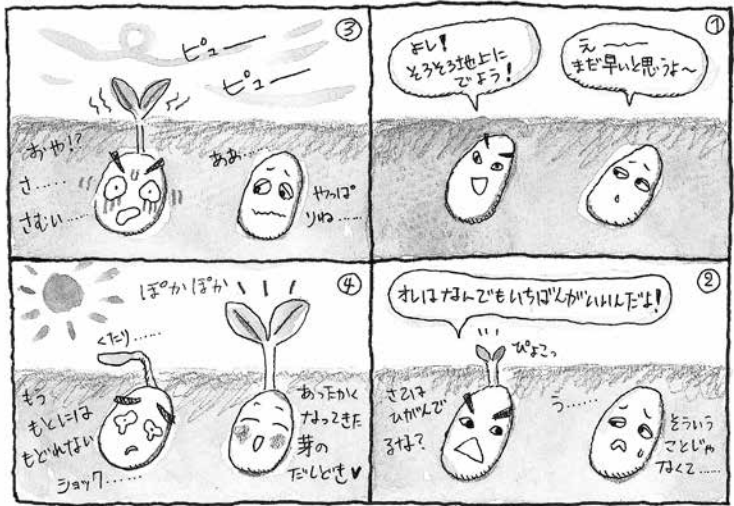
アリが種子を運ぶこともあります。カタクリやタケニグサ、スミレなどの種子には甘い砂糖のかたまりのようなものがついています。甘いものが大好きなアリは、その甘い部分を巣に運びます。このとき、種子もいつしよに巣に運ばれていくのです。やがて種子はそこで芽を出します。

勢いよくはじき飛ばされる種子もあります。たとえば、ツリフネソウの果実を触ったことがあるでしょうか？ 触れると、その刺激で果実が瞬時に裂けて、そのときに種子が勢いよく飛び出すというしくみです。これは面白いので、見つけたらそつと触ってみましょう。

ひつつき虫もあります。オナモミやセンダングサなどは、果実にとがったフックのようなものがあり、動物の体にくっついて、種子ごと運ばれます。粘液でくっつくタイプもあります。たとえば、オオバコやメナモミ、ノブキなどは、べたべたした粘液により、動物にくっつき、種子が運ばれるというしくみです。

タンポポやスキのように風で飛ばされる種子もあります。ランの仲間などは種子がとても小さいので、やはり風で飛び散るように広がります。

草花の種子は、種類ごとに異なる方法で遠くへと運ばれていきます。ところが、草花の種子に



とつては、それでひと安心というわけにはいきません。

◆ 種子は眠る

種子はいつたん発芽すると、もとはにもどれません。発芽したものの、どうも成長に適していない季節だからと、再び種子にもどるといふことはできないのです。もしも好ましくない季節に発芽したなら、その芽生えは枯死してしまうでしょう。このため、芽生えが成長できるような環境や季節に種子は発芽します。草花の種類によつては、うまくタイミングを合わせて発芽するしくみが種子に備わっているというわけです。この季節を感じるのに利用されるのが、主に温度の変化で